

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

畢 新雨

## 【所属】(助成決定時)

お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科 ジェンダー学際研究 博士後期課程

## 【研究題目】

中国における日本語サービス・アウトソーシング産業とジェンダー

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究は、中国における日本語サービス・アウトソーシングの国内産業移転において、大連と移転先の地域において労働状況の変化をジェンダーの視点から実証的に分析するものである。サービス・アウトソーシングは、企業の人事、会計、ソフトウェア開発などの業務を外部委託するものであり、1990年代からコスト削減戦略において飛躍的に成長した。この委託は越境的に行われることも多く、とりわけインドやフィリピンは英語圏のサービス・アウトソーシングが集中していることで知られる。ジェンダー研究の文脈ではこの産業において、多言語対応が可能な大卒女性たちが低賃金で就労していることが注目されてきた。本研究のフィールドである大連は、日本語サービス・アウトソーシングの拠点として90年代から成長してきた。大連のサービス・アウトソーシングの主な担い手も、日本語に堪能な女性たちである。本研究は、こうした女性たちの労働がグローバル経済の変動においてどのように再編されているかを明らかにしていく。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、申請者が在学するお茶の水女子大学大学院における研究課題の一部を成すものである。助成を受けた1年間には、以下の研究に取り組んだ。

## (1)中国における知識経済に関する文献研究

まずは、中国において知識経済はどのように発展してきたのか、中国における知識経済化の評価について把握した。次に、ジェンダーの視点から中国における知識経済化を分析した。(1)情報通信技術(ICT)部門、(2)情報部門、(3)知識集約型サービス(KIS)部門、それぞれの部門における女性労働の動向に関する議論を調べた。3つの部門における知識経済化と女性の雇用の変化をとらえた上で、中国において女性労働がどのような問題が起こるのかをまとめた。

## (1)中国における日本語サービス・アウトソーシング産業をめぐる資料の検査・複写

中国に渡航し、北京市の中国国家図書館を訪問し、中国のサービス・アウトソーシング産業の発展動向と国家政策に関する資料、本を探した。その後、大連市図書館を訪問し、大連市のサービス・アウトソーシング産業に関する本、資料を探した。そこで、大連市のサービス・アウトソーシング産業の産業発展状況を把握し、産業に関する政策を分析し、労働人口、性別、学歴な数値を統計している産業年鑑を手入れ・複写した。

## (2)サービス・アウトソーシング産業で就労する女性たちの経験をめぐるフィールドワーク

申請者は2000年以後に大連のサービス・アウトソーシング産業で就職した女性と男性に対して、学生時代の就職活動、仕事内容、日々の就労状況、転職の経験、コロナ期間の働き方等について、対面とオンラインで聞き取り調査を行った。具体的には、大学で日本語や日本向けビジネススキルを学び、サービス・アウトソーシング産業で就労する女性と男性たちに対して、半構造化インタビュー調査を行った。

また、2020年度には新型コロナウイルス感染症拡大のために実現できなかった現地調査を行った。具体的に

は、大連における日本語サービス・アウトソーシング企業が集まっているハイテク産業開発区において複数の「ソフトウェア・パーク」という政府が設立した地域を訪問した。

【結論・考察】（400字程度）

米中関係、為替レート、新型コロナウイルス感染症拡大など国際環境の変化が大連における日本語サービス・アウトソーシング産業に大きな影響を与えている。例えば、2022年3月から続く円安にともなう為替レートの激しい変動は、大連の日本語サービス・アウトソーシング企業にとっては非常に厳しい打撃となった。従来、日本企業は労働力コストをおさえる目的でサービス・アウトソーシングを導入してきたが、こうした動向は大連の労働力コストを上昇させた。このようなグローバル化において競争力が失っている状況の下で、日本語サービス・アウトソーシング産業において働いている労働者たちに、日本語能力だけではなく、より高い能力、すなわち「日本語+IT」能力が求められるようになってきている。日本語を使って単純作業を行う労働者たちはますますデジタル化されており、コンピューターに置き換えていると見られる。この趨勢において、単純作業に集中している女性労働者はより不安定な労働状況に陥る。ただし今回の調査だけで日本語サービス・アウトソーシング産業における労働状況を完全に把握できたわけではないため、今後、継続的にフィールドワークと考察を続けていきたい。